

【創刊号】パブリックヒストリー研究会 Newsletter（11月号）

パブリックヒストリー研究会 Newsletter（創刊号／2025年11月発行）をお届けします。

■ 研究会代表よりご挨拶

向寒の折、皆様にはお元気でお過ごしでしょうか？「パブリックヒストリー研究会ニュースレター」の創刊に当たり、運営委員を代表して一言ご挨拶申し上げます。

2019年に前会長の岡本充弘さんの主導によって創設されたこの研究会は、「パブリックによる／のための／のなかでの／にむけた／とともに」行う歴史実践を日本語圏でも根付かせるために、様々な活動を行ってまいりました。今年から発足した運営体制では、とくに海外のパブリックヒストリー諸団体との交流と会員の皆様との協働とを活動の二本柱として、さらなる活動の深化と充実を目指しております。

その一環といたしまして、このたび「ニュースレター」を発刊させていただき、その定期的な刊行によって、ホームページだけでなく、会員の皆様が実質的な主体となるような研究会の活動の紹介や議論の場として活用していただければと考えました。この媒体は、会員全員に開かれておりますので、今後も研究会の報告や特集企画をはじめ、様々な記事を掲載してまいります。どうか会員諸氏には積極的なご活用とご参加をお願い申し上げます。

最後に、このニュースレターの編集を担当してくださる兎澤映美さんと徳原拓哉さん、いつも会の活動を推進してくださる運営委員の皆様、そして何より研究会の活動にご参加くださる会員の皆様にあらためて感謝申し上げます。

今後とも共に、パブリックという場における歴史の営みに寄り添い、協働してまいりましょう。

2025年11月1日 本橋哲也

■ 配信方針（ご案内）

今月より、**各セメスター（約3ヶ月）に1回**を目安にNewsletterを配信します。研究会の活動報告、関連イベント情報、国内外の研究・実践の紹介などをお届けします。

こちらNewsletterのPDF版は研究会HPにも掲載しています。

▶ 要旨一覧・資料リンク：<https://public-history9.webnode.jp/newsletter/>

■ 今号の内容：9/15 京都大学 公開研究会のご紹介

2025年9月15日(月)、京都大学吉田キャンパスにおいて、第21回パブリックヒストリー研究会公開研究会が行われた。現在、研究会では会の整理や会費の設置による会員への還元を行うなど、会として運営体制を更新している。今回の公開研究会では、広くパブリックヒストリーに

関わる実践の報告を呼びかけて、本研究会が今後も持続的に「回って」いくかを試す機会にもなった。その意味で、今回、9本もの多様な実践・研究報告が集まったことは、日本においてもすでに、パブリックヒストリーが広がりつつあることを示しているといえよう。当日のプログラムは以下のとおりであった。

プログラム

10:30～10:45 開会あいさつ：本橋会長



10:45～12:15 午前セッション 司会：本橋

10:45～11:15 報告1：

徳原拓哉（神奈川県立横浜国際高等学校）「イヴァン・ジャブロンカ「方法的フィクション」の拡張可能性：歴史マンガを題材として」【小牧】

※【 】はディスカッサント（いずれもパブリックヒストリー研究会運営委員）（以下同じ）

11:15～11:45 報告2：

長谷川賢太郎（北海道大学文学院）「ヒストリー・ワークショップの歴史実践－パブリックヒストリーの源流をたずねて」【岡本】

11:45～12:15 報告3：

除本理史（大阪公立大学）・林美帆（岡山理科大学）「『福島「オルタナ伝承館」ガイド』作成の経緯と狙い」【福島】



12:15～13:30 昼休み



13:30～15:00 午後第1セッション 司会：岡本

13:30～14:00 報告4：

藤田千彩「岡山県民台湾人画家・劉生容の忘れられ方」【本橋】

14:00～14:30 報告5：

井手弘人（長崎大学）・原口泉（志學館大学）「1980年代「地方の時代」における地方局歴史番組の展開とローカル・アイデンティティ－NHK鹿児島『かごしま歴史散歩』を事例として－」【本橋】

14:30～15:00 報告6：

吉田友香（東京外国語大学大学院 博士後期課程）「ポーランドの旧ユダヤ人地区カジミェシにおける歴史実践：担い手の当事者性に着目して」【石野】



15:00～15:30 休憩



15:30～17:00 午後第2セッション 司会：福島

15:30～16:00 報告7：

Nina Andro（Maastricht Univ.）篠原琢（東京外国語大学）「Colouring In the Map: Community Photo-Mapping as a Public History Method of Centering Coloured History in the Stellenbosch District」【兎澤】

16:00～16:30 報告8：

佐藤 武（横浜共立学園中学校高等学校 社会科教諭）「ヴァイマル共和国をめぐる歴史研究の成果の市民社会への還元—Weimarer Republik e.V.の取り組みを事例に—」【柳原】

16:30～17:00 報告9：

吉野恭一郎（東洋大学）「歴史総合を巡る歴史学者の言説と現場体験—専門知識と市民的教養」【菊池】



17:00 閉会挨拶・懇親会案内：福島幸宏（慶應義塾大学）

具体的な発表要旨は以下の通りである。

1. 徳原拓哉（神奈川県立横浜国際高等学校）「イヴァン・ジャブロンカ「方法的フィクション」の拡張可能性：歴史マンガを題材として」

人々と歴史や過去との関係を考える上で、市場に流通する娯楽、特にマンガ・アニメーション・ゲームといったポピュラー・コンテンツは、それが生産され、使用され、消費される過程を通じて、歴史を再演（reenactment）し、「楽しみ」を通じて人々の歴史意識に影響を与えている（Chapman 2016）。しかしポピュラー・コンテンツが、人を楽しませ、さらには商業的な成功を収めることを重視し、そのために「フィクション」を多用するために、歴史における真理の探究や事実性の担保と食い合いが悪いものとして批判の対象ともなってきた。パブリックに流通し、私たちの日常の中に偏在する歴史・過去と、学術的な歴史との協働、交渉、衝突の次元を我々にもたらしたのだ。

本報告では、イヴァン・ジャブロンカの「方法的フィクション」を導きの糸とし、ポピュラー・コンテンツを、「人々が過去を認知する方法」として捉える可能性について、歴史マンガを題材に論じた。歴史の叙述と文体についてのヘイドン・ホワイトの問題意識を引き受けたジャブロンカは、歴史における科学性や事実・真理探究とフィクションの利用が結びつくことを論じた。それによれば、歴史家は、過去の事実と事実を連関させるために、ある種のフィクションを用いる、その意味で、歴史実証もフィクションを用いている（Jablonka 2014=2018）。このフィクションは、「テキストの外部はない」（Bartes 1984）といった構築主義的なものではなく、現実との何らかの対応関係を持って外部に開かれた存在だという。そのようなフィクションが、自らをフィクションと自覚的に用いられた時、目の前の現象を超えた現実の深い理解をもたらすことがある。ジャブロンカはそのような「フィクションの使い方」を「方法的フィクション」と呼んだ（Jablonka 2014=2018）。

ジャブロンカは、「方法的フィクション」によって、叙述やフィクションに関する議論を、それを用いる人々の手つきと方法、それが用いられるプロセスに移した。フィクションを、認知的な作用を用いて社会的な知を作り上げる行為として捉えると、同様に虚構性の持つ力を利用しながら歴史を再演し、時に人々の積極的な参与と再解釈によって歴史実践（保苅 2004）の回路を開くポピュラー・コンテンツもまた、射程に収めることができる。

ただし、ジャブロンカの議論を敷衍するには、メディア的な差異を考慮する必要がある。事実、ジャブロンカは2014年のエッセイにおいて、歴史マンガを歴史を考える題材とする可能性

について言及したが、その具体的な方法については検討の外においていた。歴史マンガは、ナラティヴのみならず、コマの利用、吹き出しとナレーション、視覚効果によってフィクションを扱うという意味において、方法的フィクションが小説以外にも適用可能かを検討する格好の題材といえる。

同時に、本報告が指摘したのは、ジャブロンカの議論を突き詰めるならば、観察者としての歴史家がフィクションの作用を外部から分析するだけでなく、作り手や読み手がそれらのフィクションをどう構成し、どう認知したのかを記述する必要であった。調査の焦点をパブリックへと移すことによって、「方法的フィクション」をより立体的に捉えることもまた可能になるのである。

参考文献

Barthes, Roland, 1984, *Les sorties du texte*, Paris: Éditions du Seuil.

Chapman, Adam. 2016. *Digital Games as History: How Videogames Represent the Past and Offer Access to Historical Practice*. New York and London: Taylor & Francis.

Jablonka, I. 2018. *History Is a Contemporary Literature: Manifesto for the Social Sciences* (N. J. Bacher, Trans.). Cornell University Press. (Original work published 2014 as *L'histoire est une littérature contemporaine*)

保莉実. 2004. 『ラディカル・オーラル・ヒストリー オーストラリア先住民族アボリジニの歴史実践』 みすず書房.

2. 長谷川賢太郎（北海道大学文学院）「ヒストリー・ワークショップの歴史実践－パブリックヒストリーの源流をたずねて」

本報告では、パブリックヒストリーの「源流」ともされる、イギリスのヒストリー・ワークショップ運動（以下、HW）を対象に、その歴史実践の実態を紐解くものである。HWは、1970年代を中心に展開された、労働者階級の人々による集合的な歴史実践である。歴史家ラファエル・サミュエルを中心に、成人教育機関ラスキン・カレッジに集まった人々は、自らの労働経験に依拠する形で独自の歴史研究を行った。サミュエルの言葉を借りるならば、HWにとって歴史とは、大学の歴史家の特権ではなく、「普通の人々」が日常生活の中で当たり前実践している、「知の社会的な形態」なのだった。同時に、HWの開放的な歴史哲学は、それゆえの批判も被ってきた。すなわち、「非専門家」の歴史実践はときに実証的ではなく、それをナイーヴに受容することは、「何でもあり」の歴史を許してしまう、というのである。ここに、パブリックヒストリーにとっては古典的な、歴史実践とその実証性を巡る問題が立ち現れる。しかし、こうした論争は歴史家の間でなされたものに過ぎず、HWの歴史実践の実態を反映したものではない。そこで本報告では、HW参加者による歴史研究、『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット』を取り上げ、その具体的な内容を明らかにした。見えてきたのは、HWに参加した「普通の人々」が、すぐれて「専門的」な歴史研究を行っているという、予想外の実態だった。参加者は、研究に当たって膨大な一次史料を収集し、それは当然、「歴史の当事者」であるはずの彼ら彼女らでさえ「知らない」過去と直面させる。重要なのは、参加者が、そうした研究を「労働者として」行うことに大きな意義を見出していた、という点である。すなわち、HWにとって真に重要だったのは、「どのような歴史を書くか」ではなく、「誰が歴史を書くの

か」という、歴史の書き手としての主体形成、そしてその立場性 (positionality) の問題だったのである。

3. 除本理史（大阪公立大学）・林美帆（岡山理科大学）「『福島「オルタナ伝承館」ガイド』作成の経緯と狙い」

3.11から14年以上が経過し、震災・原発事故への関心はしだいに薄れ、記憶の風化が懸念されている。そうした中で、3.11の経験や記憶を継承し、将来に伝えていく取り組みは重要な意味をもつ。

福島県の震災伝承施設としては、東日本大震災・原子力災害伝承館に代表される公的施設が存在感を発揮している。公的施設には独自の役割があるが、それとは別の角度からの批判や異論があつてこそ、幅広い視点で教訓を検証するとともに、対話を通じて継承を進めることができる。

公害、災害、大事故など「困難な過去」は立場によって解釈が異なり、分断や対立を惹起しやすい。福島原発事故でも、教訓の解釈権を「官」が手放そうとせずコントロールしようとする傾向があるから、多様な解釈を許容し、多視点性 (multiperspectivity) に基づく教訓の検証と継承を可能にするうえで、公的施設とは一線を画した民間施設等の果たす役割は大きいと考えられる（ただし福島では、被災が「過去」になりきっているわけではないという点にも注意が必要である）。

報告者らは、福島原発事故における民間の伝承施設・団体がもつ意義・役割に注目して研究を行ってきた。また、宮城県に本社を置く河北新報社の福島総局も同様の関心をもち、2024年1月、原子力災害に関する民間伝承施設を「オルタナ伝承館」と名づけて、施設を紹介する連載を組んだ。報告者らは河北新報社と連携し、この連載をベースに新たな寄稿などを加え、『福島「オルタナ伝承館」ガイド』（東信堂、2024年）を作成した。

民間の伝承施設においては人的・資金的な制約が大きく、継続的運営が困難になることも考えられる。本書で取り上げたような民間の施設・団体への政策的支援が、長期的復興課題として浮上しているのだといえる。

4. 藤田千彩「岡山県民台湾人画家・劉生容の忘れられ方」

今年の研究会でも発表の機会をいただき、誠にありがとうございます。昨年に続き、今年もこの場に参加できたことに心より感謝申し上げます。

今回の発表では、1960年代から70年代にかけて日本と台湾を行き来し、日本国籍を取得した台湾人画家、劉生容 (1928-1985) を取り上げ、「なぜ彼は日本の美術史から忘れられたのか」という問いを投げかけました。この研究を始めたきっかけは、日本統治時期 (1895-1945) でもなく、同時代でもない、5、60年前の日本と台湾の間に、日台関係史や美術史の関係で空白があることに気づいたためです。私は無所属という立場、つまりパブリックヒストリー的には専門家ではない立場から、既存の枠組みや政治的背景によって見過ごされてきた、彼の複雑なキャリアを掘り起こしました。

発表後、参加された先生方から「これは国際関係学では？」といった、私の専門分野の枠を超えた貴重なご意見をいただきました。これは、私の研究が持つ新たな可能性を示唆するもので、思いもよらなかったため、非常に感謝しております。

今回の発表は、日本側から見た「忘れられ方」、いわば研究の「Side A」です。今後は台湾側から見た「Side B」の視点での研究も進めていきたいです。つまり、「台湾台南人留日畫家・劉生容的被想起來的方法（日本語訳：台湾台南人で日本に行ってしまった画家・劉生容の思い出され方）」というテーマも研究を深めていきたいと考えています。これは、研究の方向性（日本美術史と台湾美術史の視点）だけでなく、発表や論文の言語（日本語と華語）の側面からも、日台の関係性を探る試みです。

このたびは、ご講評いただいた本橋会長のみならず、多くの先生方に貴重なご意見をいただき、誠にありがとうございました。今回の経験を糧に、今後も地道に研究を続けてまいります。引き続き、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

5. 井手弘人（長崎大学）・原口泉（志學館大学）「1980年代「地方の時代」における地方局歴史番組の展開とローカル・アイデンティティー NHK鹿児島『かごしま歴史散歩』を事例としてー」

1980年代、NHK鹿児島放送局が制作した「かごしま歴史散歩」（1979-1986）は、鹿児島の地域史の掘り起こしとローカル・アイデンティティ形成に大きな役割を果たした。当時、神奈川県知事だった長洲一二氏の提唱した「地方の時代」構想は、中央依存からの脱却と地方の価値の再評価を促す全国的な動きとなった。この潮流を受け、NHKも坂本朝一会長のもと、地方局の放送時間枠や裁量権を拡大する方針を打ち出した。

この環境下、NHK鹿児島は独自の歴史番組「かごしま歴史散歩」を制作した。番組は西郷隆盛のような偉人だけでなく、ごく普通の人々の「生活の中の歴史」に光を当てた点が大きな特徴だった。たとえば、明治・大正時代の鹿児島の食生活を再現した「芋にがらんつ」（1984年7月放送）の回では、大正元（1912）年発刊の書籍『作人五郎日記』の記述をベースに、著者の妻である当時97歳の女性から話を聞き、書籍内に表現された当時の日常を伝えた。

制作の背景には、当時鹿児島大学助教授だった原口泉氏の存在があった。原口氏は、番組スタッフや取材先の住民と水平的なネットワークを築き、大学での教育研究とメディアでの発信を一体的に展開した。学生とのフィールドワークから始まり、地元住民との共同調査を経て番組化に至るなど、15分の番組制作に半年以上かけることもあった。

このような歴史学者、メディア、地域住民が協働で「地域知」を掘り起こし発信する循環は、まさしく「パブリックヒストリー」の実践であったと言える。番組はやがて書籍化され、地域の生活史が全国出版されるメディアミックス的展開も実現した。

この取り組みは形を変えながら現在も続いている。歴史に関する講演活動や鹿児島市内の小学校で地域史を探究する学習プロジェクトへの関与など、歴史を「与えられる」のではなく「創る」ものとして学ぶ機会を広げている。1980年代の「かごしま歴史散歩」は、テレビが地域の歴史と人々をつなぎ、未来へと続く「シビックプライド」を育んだ先駆的なモデルと言えるだろう。

6. 吉田友香（東京外国語大学大学院 博士後期課程）「ポーランドの旧ユダヤ人地区カジミェシにおける歴史実践：担い手の当事者性に着目して」

本報告では、ポーランドの旧ユダヤ人地区カジミェシにおける歴史実践の特徴について、担い手の当事者性に着目しながら考察した。また、ポーランドの地域をパブリック・ヒストリーの

観点から論じることで、ポーランド人とユダヤ人の関係をめぐる議論に、どのような新しい視点をもたらすかについて検討した。本報告の結論は以下の3点である。

1点目は、カジミェシで想起される歴史は、必ずしもカジミェシのユダヤ人に関係しているとは限らないということである。カジミェシの歴史実践の一部は、イスラエルやアメリカのユダヤ人団体の支援によって行われている。こうした外部の担い手の存在が、想起の対象を多様化させる原因の一つになっていると考えられる。

2点目は、ユダヤ人としてのルーツを持つ人々が、ユダヤ性を獲得するためにカジミェシの歴史実践に参加していることである。とりわけカトリック教徒のポーランド人にとって、カジミェシの歴史実践は自らのユダヤ人としてのルーツを知るきっかけになっている。カジミェシは、こうしたポーランド人が自分と同じ境遇の人々と出会い、新しいアイデンティティを模索する場でもあるのだ。

3点目は、「ポーランド人」と「ユダヤ人」の枠組みの再考についてである。これまで絶滅政策の記憶をめぐるポーランドの議論は、ポーランド人に対するユダヤ人、あるいはカトリック教徒に対するユダヤ教徒という、二項対立のなかで語られてきた。だが、実際にはポーランド人とユダヤ人という二重のアイデンティティを持つポーランド市民が多数存在し、その多くが歴史実践を通じてユダヤ性の獲得に努めてきた。したがって、「ポーランド人」と「ユダヤ人」という枠組みは、パブリック・ヒストリーの文脈で明確に区別することは難しいといえるだろう。

7. Nina Andro (Maastricht Univ.) 篠原琢 (東京外国語大学) 「Colouring In the Map: Community Photo-Mapping as a Public History Method of Centering Coloured History in the Stellenbosch District」

Developed as part of her studies at the Tokyo University of Foreign Studies, Nina Andro's Colouring In the Map (CItM) project explores the question of how communities preserve their past when official archives silence their stories. In Stellenbosch, South Africa, a town celebrated for its colonial architecture, wine culture, and prestigious university, the histories of its largest demographic group, the so-called 'coloured' population, remain largely invisible in public memory and institutional records. Decades of colonialism and Apartheid not only displaced thousands of people of colour from the town centre but also erased their presence from the historical narrative. Yet, in the face of this erasure, informal spaces like barbershops and mosques have become centres of collective memory, filling in the gaps left by traditional archives.

Through a community participatory approach, the CItM project created an interactive digital map by geotagging historical images onto Stellenbosch's contemporary landscape. Through this, it becomes possible to visualise the neighbourhoods, schools, and social hubs where coloured residents once lived, worked, and thrived before Apartheid's Group Areas Act forcibly relocated them to the urban periphery. The project revealed something else with significant research implications: the existence of Informal Community Memory Centres (ICMCs). Such spaces, like a barber shop and mosque, weave together photographs, oral stories, and everyday interactions to form a living counter-archive. These ICMCs are not just repositories of the past, but dynamic sites where history is actively shaped through material culture, spatial dynamics, and social networks.

The research paper presented at the conference, reflecting on both the output and process of the project, calls for a critical shift in historical methodology. When institutional archives proved inadequate for researching the area's coloured community due to their colonial and Apartheid-era biases, Nina turned to ethnography, building trust with community gatekeepers to access private collections and oral histories. The resultant prototype map not only reconstructs a lost landscape but centres the voices of those long excluded from Stellenbosch's official history. The project thus underscores the importance of community-driven research and interdisciplinary collaboration, blending public history, anthropology, and archival studies to recover marginalised pasts. It also invites historians to rethink how we approach silenced narratives, as ICMCs demonstrate that history is not only preserved in documents but also in the social fabric of everyday spaces. Studying such spaces offers a model for inclusive historiography that prioritises collaboration, ethical reciprocity, and the amplification of previously-silenced voices.

Explore the project: Colouring In the Map (<https://storymaps.com/stories/7af5487e90c54ff0839c1e5aace41316>)

8. 佐藤 武（横浜共立学園中学校高等学校 社会科教諭）「ヴァイマル共和国をめぐる歴史研究の成果の市民社会への還元 ―Weimarer Republik e.V.の取り組みを事例に―」

本報告では、ドイツにおいてヴァイマル共和国に関する歴史研究の成果が、どのように市民社会に還元されているのかを、“Weimarer Republik e.V.”の取り組みを事例に論じた。内容は2023年3月に執筆した修士論文を基礎に、現在の報告者の関心に寄せて要約・再構成したものである。現在の報告者の関心は、中学・高校の教員として働く中で、歴史に強い関心を持つ人はごく一部に限られることを痛感し、歴史に関心がない「普通の人」に、いかに最近の歴史研究の成果を還元するのか、というものである。その点、“Weimarer Republik e.V.”は、ドイツにおけるヴァイマル共和国の歴史研究の成果と市民の歴史認識の間に存在するギャップを解消するために、市民のヴァイマル共和国の記憶を強化することを重視した活動を展開しており、参考になる部分があると考え、報告を行った。

結成から10年以上が経過した“Weimarer Republik e.V.”は、様々な活動を展開しているが、特に報告で強調したのがショッピングモールや鉄道の駅をめぐる巡回展の実施である。ショッピングモールや鉄道の駅にいる人々は、基本的に観覧そのものを目的としていないため、博物館などと異なり、歴史に関心のない層に届く可能性が高い。実際の展示では、時間のない人に別の機会での訪問を促す展示や、関心を持った人が深掘りできる仕掛けが用意されていた。さらに展示内容は、最近の歴史研究の成果を十分に踏まえたものであり、現代社会の課題との接点も明確にしていた。

「歴史学の成果を市民社会に還元する」ということは、パブリックヒストリーの重要なテーマの一つであり、職務上、私も継続して検討すべきだと考える。今後は自身の現場での実践報告などを研究会で取り扱うことができるように研鑽したい。また今回、専門家から得た助言も踏まえ、修士論文の雑誌投稿に向けた加筆修正を進める所存である。

9. 吉野恭一郎（東洋大学）「歴史総合を巡る歴史学者の言説と現場体験—専門知識と市民的教養」

2022年から歴史総合及び探究科目が導入された。その直接的な背景は2006年の世界史未履修問題だが、少なからぬ歴史学者はこれを歴史教育をアップデートする良い機会と捉えた。戦後の歴史科目を貫いてきた西洋中心主義、男性優位、国民国家的枠組み等が批判され、実践面でも暗記学習の軽減や一次史料・図像資料等を用いたアクティブラーニング型の授業が提案された。

これらの改革案が有意義であることは論を俟たない。しかし、高校教育の現場での反応は複雑である。まず、常識やナラティブの解体は、分かりやすさの減退や形而上的苦痛を引き起こしうる。それゆえ、学問的には有意義でも、分厚い知識やノウハウを持たない初学者には相応の配慮が必要である。また、アクティブラーニング型授業についても、中等教育での継続的な指導経験を持たない歴史学者が想定するのは、往々にして教員自身の自己像にも似た「研究者の卵」的生徒像である。

他方、歴史学と並んで歴史教育に大きな影響力を持つ社会科教育学に対しても、批判的検討が必要である。そのプラグマティックな問題意識に基づく提案は、確かに歴史総合の実践において示唆に富むものも多い。しかし、分かりやすさや啓蒙性・公共性を重視する授業デザインやテーマ学習は、しばしば歴史的事象を過度に概念化・序列化し、その具体性と一回性を希薄化してしまう恐れもある。

さらに高校教員も、進学実績を始めとする業績主義や、学力向上を通じた生徒管理推進の動きが、結果的に非受験科目の軽視やインクルーシブ教育の阻害に繋がる危うさについて、常に自省が求められる。

こうした問題を改善するための手がかりとして、本報告では史学史を用いたメタ的視点の導入、丸山眞男や宮崎市定らの「古典」を教材とするアクティブ・ラーニング、歴史学と教育学の学際的対話、暗記学習の再評価、教育指導要領及び現行教育制度への批判的眼差しなどを提案する。

以上9本の多様な報告について、全てに言及して詳細に紹介することは紙幅の都合上できないが、編集委員から以下の点について簡単に論点を提示しておきたい。

まず注目すべきは過去の表象やナラティブを生み出すプロジェクトそのものだけでなく、それらに関与・参加する人々のモチベーションや具体的な活動内容に関心を払う視点が多く見られたことである。人々の能動性への着目は、多様なパブリック(publics)に対する研究者側の想定や推測の外側から、その眼差しを問い直す。これに注目を払うことは、「なぜそれをパブリックヒストリーとして見るのか」という重要な問いをもたらす。パブリックヒストリーが、「パブリック(s)」という意味でも、「ヒストリー(ies)」という意味でも多様な実践を含みうるということは、一方でそれを「なんでもあり」にしないための議論の洗練を必要としよう。

次に、時間の経過や政治的力学の中で忘却・周縁化された経験・記憶・語りとどのように向き合うかという、パブリックヒストリーの中心的な問いのひとつを再確認する報告も多く見られた点があげられる。忘却や周縁化が、植民地主義や災害の政治化といった、権力構造や制度

をてこととして生じることが、国内外の具体的な事例を通じて明らかにされている。これらの報告は、ローカルな実践とグローバルな問題とが共振していることを示していた。

そして、多くの報告で、公的・支配的ナラティブに対する非公式・草の根の実践の可能性が指摘されたことも注目に値する。制度的・公的な歴史叙述とは異なる視点や方法で過去の経験や記憶を保存・継承・解釈する取り組みが紹介されたと同時に、これらの非公式・草の根の活動が直面する持続性や資金面での課題も提起されたことは、パブリックヒストリーが現場の学、実践の学である点からして重要な指摘であった。

全体的に、どの報告も報告者自身の立場性や現場で活動する自らの立場に対する意識や自省的な視点が一貫していた。多様なパブリック(s)を外側から分析する立場でありながら、同時に直接交流する立場を持つ、2重の身体性を抱えることになるパブリックヒストリアンたちが自らを、さらにはこの関係性そのものを問う姿勢も見られた。このことは、あらゆる立場の人々が従来の枠組みを超えて交流する可能性をひらく。

これらの報告を踏まえ、今後さらに検討の必要がある論点を二つ提示したい。一つに、公式的・支配的ナラティブを再生産しうる、歴史家のゲートキーピングの問題をより具体的にどのように解決していくかである。誰が歴史を語る権利を持ち、誰の声が聞かれ、誰の声が排除されるのか—こうした問いは複数の報告で触れられていたが、その具体的な解決策については議論の余地があるといえる。既にいくつかの国で展開されているポリシーメイキングの議論を参照しつつ、日本からはそれをどう問い返しうるのか、議論の進展が望まれる。二つ目に、日本の植民地主義と帝国的過去に対する現在の政治的な争いという文脈である。パブリックヒストリーの国際的な文脈では、脱植民地化が一つのキーワードとなっているが、往々にしてその視点はヨーロッパ各国の植民地主義に注がれ、脱植民地化という視点そのものが西洋的眼差しの中から生じていることが指摘されている。日本における植民地主義を問い返す試みは研究でも、人々の活動においても数多く存在している。これらの議論を積極的に交差させ、日本の立場からパブリックヒストリーそのものを問い直していくことは今後の議論において必要不可欠であるといえる。（文責：兎澤・徳原）

■ 次号予告（*および次号以降の公開範囲について*）

本号は**創刊号につき会員以外にも公開**します。

****次号（2026年2月発行予定／特集「パブリックヒストリーと演劇」）**より、会員限定公開**を予定しています。

■ 寄稿募集（随時）

本Newsletterでは、日本内外のパブリックヒストリーに関わる**実践・研究**を継続的に紹介し、領域の進展に寄与することを目指します。

寄稿いただける方は、**200字程度のアブストラクト**を添えて、媒体を問わず（テキスト／映像／

音声／図画など歓迎）お送りください。掲載可否や体裁は編集委員会で調整のうえご連絡します。

【寄稿送付先】 phjpnewsletter@gmail.com

【記載事項】お名前・ご所属／アブスト（200字）／想定掲載形式（テキスト・画像・動画・音声等）／ご連絡先

■ 研究会活動予定

今後予定されている研究会の活動は以下の通りです。最新の情報は研究会HPでもご確認いただけます。

パブリックヒストリー研究会 書評会（オンライン）笠井賢紀・田島英一編『パブリック・ヒストリーの実践：オルタナティブで多声的な歴史を紡ぐ』（慶應義塾大学出版会、2025年）

日時：11月1日(土) 17:00～20:00

17：00～ 司会：柳原伸洋（東京女子大学）：趣旨説明、Zoomに関する注意点など

■それぞれの関心・観点からの書評

17：10～ 本橋哲也（東京経済大学）

17：30～ 徳原拓哉（神奈川県立横浜国際高等学校）

17：50～ 大江洋代（東京女子大学）

18：10～ 標葉隆馬（慶應義塾大学）

18：30～ 休憩

■執筆者からのリプライと議論

18：45～ 笠井賢紀：書籍の紹介など

19：00～20：00 著者参加者からのリプライとその後に議論

■登録先のリンク（登録後、Zoomリンクが表示されます）

<https://forms.gle/9Yj3Db6JJ9duMWvE7>

パブリックヒストリー研究会 公開研究会 実践人文学の現在地：『人文学を社会に開くには：パブリックヒューマニティーズから考え・行動する』（文学通信、2025年）第3部執筆者と語る

開催日時・会場

・日時：2025年12月7日（日）14:00～17:00

・会場：東京女子大学（9207教室（9号館2階））＋Zoom 併用のハイフレックス開催

14:00-14:15 開会・趣旨共有（司会：菊池信彦）

14:15-15:00 リレーブックトーク（第3部執筆者によるショート発表・各5分）

登壇予定者（順不同）

福島幸宏

矢野浩二郎

三好清超・小林遼香・上原惇（石棒クラブ）*まとめて10分

北村紗衣

河西秀哉（歴史フェス）

大川内直子

池尻良平

柳原伸洋

15:00-15:10

休憩

15:10-16:50

全体ディスカッションとフロア参加者との意見交換

16:50-17:00

クロージング

※参加無料／現地・オンラインともに事前申込が必要です。

下記参加申込フォームからお申込みください。ZoomミーティングURLはフォーム送信後に表示されます。

<https://forms.gle/UqHuKJKbcGu5vDqBA>

※研究会終了後、会場周辺のお店で懇親会を開催予定です。懇親会参加をご希望の方は、上記の研究会参加申込フォームにてお知らせください。

■ お問い合わせ

パブリックヒストリー研究会 Newsletter編集委員 徳原・兎澤

E-mail : phjpnewsletter@gmail.com

Web : <https://public-history9.webnode.jp>

今後とも、研究会の活動へのご支援・ご参加をよろしくお願い申し上げます。

パブリックヒストリー研究会 Newsletter編集委員／運営委員一同